

語り継ぎたい多摩丘陵の歴史と遺産

小 俣 軍 平

1 はじめに

この月報でも皆様おなじみの多摩丘陵ですが、実はこの丘陵がどのように形成されたのかについては、現在でも未解明な部分が残っています。今回はホタルの生態には直接かわりはありませんが、多摩丘陵の誕生を巡って謎とされている問題を考えてみたいと思います。

私がこの問題を知ったのは、ホタルの生態調査ではなく、ある植物の分布に係る研究の中でのことでした。その植物とはアカネ科のヤブムグラ、絶滅の恐れのある貴重種です。

1：図 八王子市南野七国峠 写真の赤道の傍らがヤブムグラの生息地



2：図 他の植物と一緒に茂っている小さな葉がヤブムグラです

ヤブムグラの分布は、関東平野の茨城県・千葉県・埼玉県・東京都・神奈川県東部だけです。原産地は神奈川県の相模原市付近ではないかと言われてはいますが、確定ではありません。

相模原市には、山梨県の富士五湖の一つ山中湖を源流点とする相模川があります。この川は関東山地に源を発し、大昔は関東平野の山沿いを東に向かって流れ、茨城県の日立市付近に注いでいたと言われてはいます。その後、長い長い時間をかけて関東平野を東から西へ時計回りに流路を変えて、現在は平塚市に流れ込んでいます。このことから、ヤブムグラの種子を関東平野に拡散したのは、相模川ではないかと言われてはいます。

それにしても謎は残っています。相模川のような大河が流れる方向を変えるわけですから、大きな地殻変動が起きているはずはです。それも一度のみでなく、長期間にわたって何回も連続して起きていたと考えられます。ところがその様な記録が見つからないのです。

八王子市内で多摩丘陵の尾根を形成している地層をボーリングしてみますと、山梨県の東部と郡内地方にだけ存在する「桂川礫層」と呼ばれる岩石が出てきます。鶏の卵程の礫で、日本列島の形成時代に、現在のフォッサマグナの地域で太平洋側から日本海側までが観音開きになって 3000m の深海に沈んだ際に形成された礫岩だそうです。この桂川礫層の存在から、多摩丘陵が相模川の扇状地ではないかという説は、いちおう納得できます。

ただ、それでは相模川の流路を東から西へ 180 度変えた地殻変動は何だったのでしょうか。またその結果、海底で形成された地殻が隆起し現在の多摩丘陵になった元の力は何だったのでしょうか。

ご存じの方がおいででしたら是非ご教示いただきたく思います。

2 多摩丘陵と縄文・弥生式土器

1968 年、私が八王子市第七小学校の教師として 6 年生を担当していた時の出来事です。

6 年生は、社会科で日本史を学びます。ある朝、私が教室に行くと、教卓の上に縄文式土器と弥生式の土器が置かれていました。そして、中川君という子が、「小俣先生、これは何だか知っていますか」と言いました。私が

「これは縄文式土器、こちらは弥生式土器ですね」

と答えると、

「そんなことはだれでも知っています。縄文式・弥生式にもいろいろあります、それを聞いているのです」

と言われました。私には判りませんでした。

中川君の話によれば、4 年生の時から八王子市内の多摩丘陵の畑や田んぼに落ちている土器のかけらに興味をもって採集していて、八王子市立郷土資料館に持って行くと、学芸員の服部先生が詳しく教えてくれる、というのです。

そこで、私も中川君のお供をして、多摩丘陵の土器拾いをすることにしました。次の週の日曜に中川君と出かけるという話を、クラスの子供たちにもしたところ、7 人の男の子が一緒に行きたいといい、同行することになりました。

この日に行ったのは、第七小学校のある台町のすぐ隣の小比企町の畑でした。耕されたばかりの畑には農家の方はいませんでしたが、畑の中の小道を歩きながら見ますと、中川君が「ほら、あすこ・・・」と指さすところに、土器の破片が落ちていました。「すごい！！」と、子供たちが興奮して歓声を上げました。

こうして採集した土器の破片を郷土資料館に持って行くと、服部先生が、いつ頃の時代のものか、どのような土器のどの部分の破片なのかを、詳しく説明してくれました。子供たちは、眼を丸くし、耳をそばだてて先生の説明に聞き入っておりました。私の下手な社会科の授業ではみたことのない集中力でした。そこで服部先生にお願いして、それから毎週、子供たちと多摩丘陵で日曜日に採集した土器片を見ていただくことになりました。

3 黒曜石ルートの謎

子供たちと多摩丘陵の田・畑で採集した物の中には、もう一つ大切なものがありました。黒曜石です。服部先生によると、多摩丘陵には黒曜石の産地は無く、よそから持ち込まれたそうです。一つは伊豆半島天城山から、もう一つは長野県茅野市の車山高原から、私たちは黒曜石を見ても違いが判りませんが、服部先生は仕訳をしてみせてくれました。

交通手段の無かった縄文・弥生時代に、そんな遠くのをどのようにして手に入れていたのでしょうか。想像するところ、産地側と八王子側の双方から出かけて行き、出会った場所で物々交換していたのでしょうか。そして、伊豆半島・長野県との、それぞれ中間点にあたる神奈川県・山梨県あたりで、その交流をサポートした縄文人や弥生人もいたのではないのでしょうか。

4 小泉さんの土器講話

3：図 東京都有形文化財 小泉屋敷



八王子市の鎌水というところに、東京都の有形文化財として一軒の古民家が保存されています（3：図）。「小泉屋敷」と呼ばれるこの家屋には、60年前まで、地元の方々から「小泉さん」と慕われた方が住んでおられました。お屋敷自体も写真の様に素晴らしいものですが、このお宅にはさらに、多摩丘陵の開発前に収集された縄文式土器・石器・石斧、弥生式土器・石器・石斧がたくさん保存されていました。

そこで、わたくしは6年生の担任になると、日本史を教える際には必ずこのお宅を訪ねて、子供たち向けの公開講座を開いていただきました。

4：図 「小泉屋敷」の軒先と庭先



屋敷の主である小泉様が、この庭にシートを敷き、お持ちの縄文時代・弥生時代の土器・石器・石斧などを並べて公開してくださって、それらにまつわる歴史をひとつひとつ丁寧に説明してくださいました。当時の多摩丘陵でも唯一無二の、素晴らしい内容の特別講座だったと思います。現在70代・80代になっている私の教え子たちが、同級会を開いて集まると、この講座について、まるで昨日の事のように話題が盛り上がります。

あとがき

昨年の夏の酷暑に続いて、今年の冬は、豪雪が日本列島の日本海側北部を襲い、深刻な雪害をひきおこしています。後期高齢者もいいところの私は、会員の皆様の所へ雪かきのお手伝いにも行けず、申し訳ございません。ご無事を毎日お祈りしています。

東京は、陸生ホタルの冬季調査に支障はないのですが、酷暑に見舞われて以来、陸生ホタルの幼虫がほとんど姿を見せなくなり、成果が上がりません。春を待つばかりです。

立春がすぎて、このところ暖かくなってきましたので、来週あたりから陸生ホタルの幼虫調査を再開したいと思っております。

今回お送りした多摩丘陵の歴史にまつわるエピソード、如何でしたでしょうか。拙い報告ですが、会員の皆様にはぜひご意見ご感想をお寄せください。お願いいたします。